

「神様」に、礼

校長 武井 正明

先日 24 日、アオーレ長岡で行われた大相撲長岡巡業に行ってきた。

当初、親父を連れてくる予定であったが、残念ながら今回からは、妻とふたりで観ることになった。（妻とふたりでつまらないという意味ではありません）

親父と一緒に時はもう、朝一番で会場入り。9時の打ち出しから15時の終わりまで、びっしり6時間入り浸り。黙っていれば昼食も摂らずに、会場の隅から隅まで歩き回って力士を追い掛け回していた。それに付き合うのは難儀であったが、連れて来る甲斐があった。もう少年ファンがそのまま大人になったようなもので、よくまあ観るたびに、これだけ夢中になって観られるのだなあと感じたものだ。

今回は横綱に、心の中でお礼を言おうと思って会場に入った。

親父は、大の里関が優勝し、横綱を決めたのをしっかり喜んで天国に行った。

優勝の瞬間、突然万歳をして赤ワインをうまそうに舐めた親父の笑顔が忘れられない。大の里が、病室の重苦しい空気を一瞬でパッと明るくしてくださった。

だから、相撲界の神様である横綱は、私にとっても、感謝に堪えない「神様」である。

会場に入ると、すぐにストレッチをしている横綱を見つけた。

もう昔の大の里ではなかった。

身体はさらに一回り大きくなり、何よりも横綱の風格が、ごく自然に威厳を放っていた。周囲には黒山の人だかり。とても気安く近づける状況ではなかった。

よく「立場が人を育てる」というが、やはり横綱という頂点を極めた者だけにしかわからない覚悟が、威厳という形で周囲に伝わるのだろう。

私たちは親父ではないから、会場には10時半頃に入り、再三場外に出て休憩した。

親父も一緒に来ているのかなあ…。おい、もっと集中して観たらどうだ、と上から声が聞こえてきそうだった。

会場を見渡すと、後ろに手を組んでじっと前を見上げる仕草が、親父にそっくりな高齢者の方々を見つける。その度に親父を思い出す。まだその辺にいる気がする。

力士たちは、こうやって多くの国民に楽しみや喜びを運んで、各地方を巡っている。翌日は金沢、強行軍だ。やはり相撲は「国技」なのだと、しみじみ思う。

来月、国技館で秋場所が始まる。

秋場所は一緒に写真を撮ってもらった、私と同じ苗字の本名「武井朔太郎」熱海富士関に期待したい。

力士の皆さん、楽しい一日を、本当にありがとうございました。